

子どもの創造性が社会に与える影響についての基礎研究Ⅱ

— 子どもの作品に関する文献調査による課題整理 —

松浦 藍

本研究の目的は、子どもの創造性と社会とを関連付ける活動を通して、大人が子どもの表現活動に対する新たな価値を獲得するよう促すことである。第一次研究の二つ目にあたる本論では、子どもの作品に関する先行研究から、美術教育における子どもの作品への捉え方について整理する。本調査では、先行研究の調査期間を2008年から2023年の16年間と設定し、美術教育に関する学会誌の三誌に掲載されている研究論文を対象とした。その結果、本調査においては、小学生や未就学児の作品を取り上げる研究が多く、写実表現に向かう中学生や高校生の作品への言及がなされていないことと、子どもの作品自体の「価値を生産」する研究は散見されるものの、「価値を普及」する視点が不足していることがわかった。

Keywords：美術教育，子どもの絵，表現活動，創造性

1 本研究の概要における本論の位置づけ

本論は、子どもの作品に関する文献調査を通して、美術教育における子どもの作品への捉え方について整理するものである。そして、本論で得た成果を基に、子どもの絵の新しい価値を検討し、子どもの創造性が社会に与える影響に関する研究を進める予定である。以下では、本研究全体の目的や概要について詳述した上で、本論の目的と概要について述べる。

(1) 本研究全体の目的

本研究全体の目的は、子どもの創造性と社会とを関連付ける活動を通して、大人が子どもの表現活動に対する新たな価値を獲得するよう促すことである。本研究の目的達成のため、子どもが学習過程で制作した作品を、作者である子どもとは異なる家庭や地域の人々に貸し出す活動を通して行う。

本研究において、子どもの絵を家庭や地域に貸し出す活動名を「子どもの絵ホームステイプロジェクト」(以下、子どもHSと表記)と設定した。その際、学習過程と社会や文化とを繋げる方法として、佐伯胖の「文化的実践¹⁾」を基底概念とした清田哲男らの「美術の学習過程の構造²⁾」(以下、清田らが示

した学習構造をCP構造と表記)を活用する。そのため、子どもHSで貸し出す作品は、文化的実践を根底とした美術科や図画工作科の学習活動でつくられた作品ということになる。

学習過程と社会や文化とを繋げることは、学習指導要領においても、「主体的に社会の形成に参画し、国際社会に生きる日本人としての自覚を身に付けるようにすること³⁾」への配慮を示されていることから、急務と言えよう。これからの社会をつくる担い手として成長することを期待されている。しかし、Mihaly Csikszentmihalyi⁴⁾やRonald A.Beghettoら⁵⁾が述べる創造性に関する理論を整理すると、子どもの創造性に関する課題は、社会への影響力や、文化との関わりの弱さであることを確認できた⁶⁾。つまり、子どもの創造性は社会との関わりが弱いため、「大人の枠組み」がないと子どもの創造性を生かしていく状況が予想される。

(2) 本研究の構成

以上の状況を踏まえ、本研究の目的を達成するために、本研究を大きく分けて4段階で構成した。

① 子どもHSに関する先行研究調査

- ② 子どもの創造性の測定方法に関する研究
 - ③ 文化的実践の題材検討
 - ④ 子どもHSにおける調査研究
- ①～④の関係性をまとめたものが、図1である。

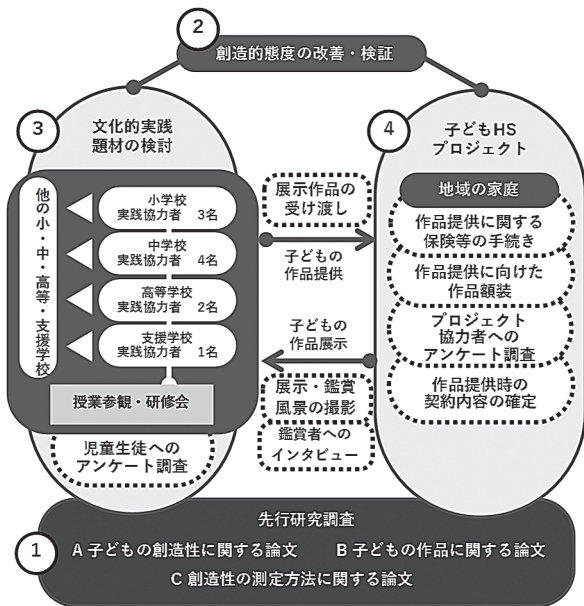


図1 本研究全体の構成

第一次研究では、子どもHSに必要な先行研究を調査する。図1における「A 子どもの創造性に関する論文」の調査は、岡山大学大学院教育学研究科研究集録185号の「子どもの創造性が社会に与える影響についての基礎研究—子どもの創造性に関する課題の理論的整理—」⁷⁾である。そして、本論は「B 子どもの作品に関する論文」の調査に該当する。本論についての詳細は、次項で詳述する。また、「C 創造性の測定方法に関する論文」の調査は、第二次研究以降の調査方法を確立するために行う。

第二次研究では、子どもだけでなく、大人も新しい価値に向かう態度から創造性を測定する方法を検討し、創造性の育成と文化的実践との関係性を明らかにすることを目指す。

第三次研究では、CP構造に基づき、多様な児童・生徒の実態や環境に応じて題材の作成と実用化等を目指す。そして、第一次研究での先行研究調査も踏まえて、CP構造の有用性について検討を行う。

第四次研究では、第一～三次研究を踏まえて検討した子どもHSを通して、大人が子どもの表現活動に対する新たな価値を獲得することを目指す。

(3) 本論の目的

先述した通り、本論は第一次研究のBに該当する。本研究で行う子どもHSの独自性や妥当性を明確に

するために、絵だけに限らず、立体作品や機能表現の作品も含めて、どのような研究がなされてきたのかを検討する。

また、「子ども」が示す年齢は幅広く、同じ「子ども」でも幼児期と思春期とでは表現の質が全く異なることは明らかである。東山明が「美術教育の在り方を考える場合、その土台として子どもの絵の発達段階を抜きにしては考えられない⁸⁾」と述べていることから、各年齢の「子ども」における研究の傾向を明確にする必要があると言えよう。

以上のことを踏まえ、本論の目的を、子どもの作品に関する先行研究の傾向を明確化し、現在の美術教育における子どもの作品への捉え方を整理することと設定する。

2 子どもの作品に関する先行研究の調査方法

本論では以下の手順で、子どもの作品に関する先行研究の調査を行う。

(1) 調査対象の学会誌

本稿で調査対象とする学会誌は、J-STAGEとCiniiにおいて、「美術教育」と「学会誌」というキーワードで検索し、該当した日本の学会誌を扱うこととした。そうすることで、日本の美術教育に関する研究を網羅できると判断したからである。

その結果、大学美術教育学会の学会誌『美術教育学研究』、日本美術教育学会の学会誌『美術教育』、美術科教育学会の学会誌『美術教育学』が該当したため、三誌を本稿の調査対象とした。

(2) 調査対象の期間

本論では、調査対象とする期間を、2008年（平成20年）から2023年（令和5年）までの16年間と設定する。この期間は、現在から一つ前の学習指導要領が告示された時期である。

(3) 集計する論文の条件

調査期間に投稿された学会論文の中で、①題名に「子ども」、「子供」、「幼児」、「児童」や「生徒」等子どもの作品に関する語句を明記している論文、②キーワードに、①で示した語句や子どもの作品に関する語句を明記している論文、③①や②に該当しなくても論文の考察の中で子どもの作品に関して述べている論文の三つの条件に当てはまる論文を集計することとする。

(4) 集計する際の観点

子どもの作品に関する論文を、集計する際の視点

は五つある。具体的には、①各年における論文数、②子どもが示す年齢、③調査対象、④子どもの作品の領域と種類、⑤研究目的の種類である。尚、②を集計する際、高校生までを集計対象としたため、0～18歳と設定した。

3 子どもの作品に関する論文の集計結果

2008年（平成20年）から、2023年（令和5年）の期間における論文数は1398本であった。そのうち、子どもの作品に関する考察がなされている論文（以下、子ども作品論文と表記）は、58本であり、4.14%であった。

（1）各年における子ども作品論文の割合

2008年（平成20年）から、2023年（令和5年）にかけての論文数に対する、子ども作品論文の割合を隔年ごとに算出した（図2）。

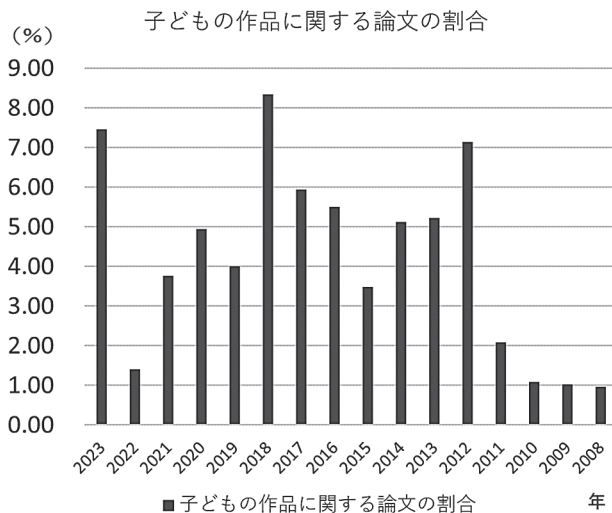


図2 子ども作品に関する論文の割合

図2の顕著な結果として、子ども作品論文の割合が高い年は、8.33%の2018年、7.46%の2023年、7.14%の2012年の順であった。

（2）「子ども」が示す各年齢の割合

子ども作品論文で示された「子ども」の年齢を集計し、子ども作品論文数に対する各年齢の割合を算出した（図3）。ただし、一つの論文につき複数の学年を対象とした調査の場合は、それぞれの学年を集計した。

図3の調査結果では、小学生に該当する年齢が多い。最も少なかったのは、16～18歳という高校生に該当する年齢であった。就学前である3～5歳の子どもを想定した論文は、20%以上であり、就学前で多かった年齢は4歳である。

（3）調査対象の割合

子ども作品論文において、調査対象について分類し、集計した。調査対象の項目は14個となり、図4の通りの結果となった。集計例として、幼稚園の年少クラスの子どもの対象として調査を行った場合は、「幼児」をカウント1と集計したこととなる。また、小学生の作品展に関する文献を調査対象とした場合は、「小学生 低学年」、「小学生 中学年」、「小学生 高学年」と「文献」をそれぞれカウント1と集計した。重複して集計する理由は、調査対象一つひとつの傾向を見て取ることをねらいとしているからである。

尚、図4には、集計時に筆者が想定したが該当論文がなかった項目（高校生や高校教員等）も含めて表記した。

図4の顕著な結果は、小学生低学年が41.38%、中学年39.66%、高学年37.93%の順で割合が高いこ

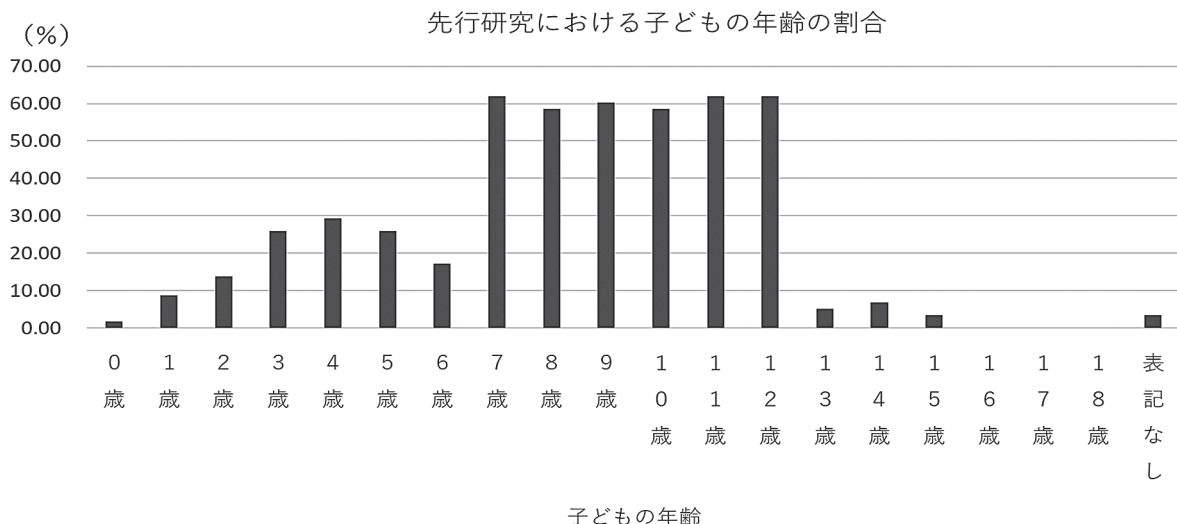


図3 子ども作品論文における子どもの年齢の割合

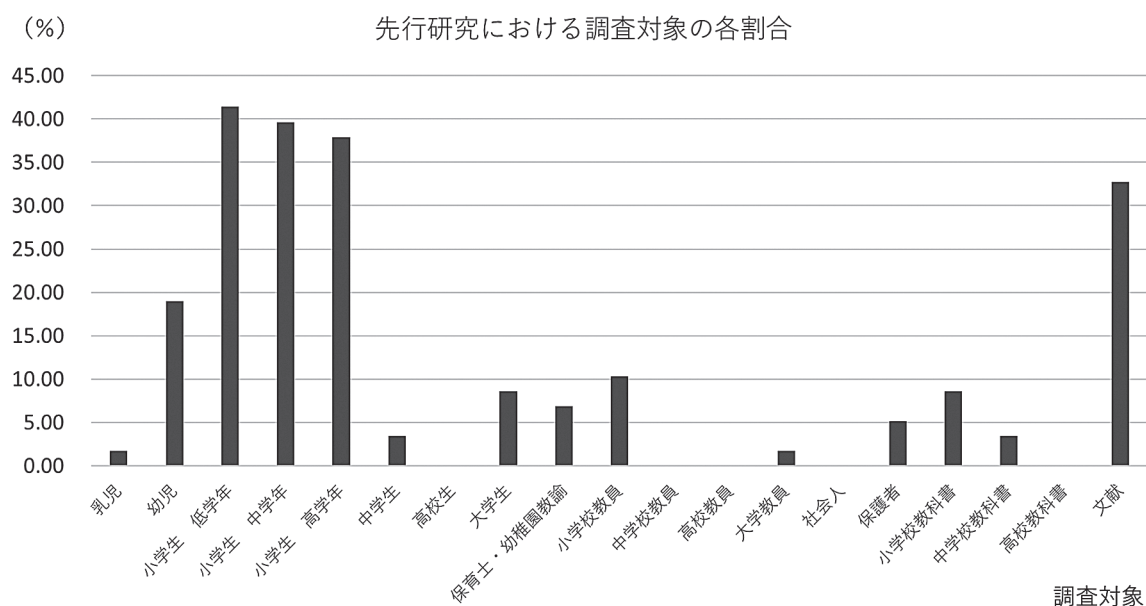


図4 子ども作品論文における調査対象の各割合

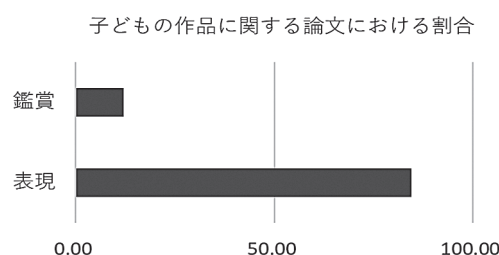


図5 子ども作品論文における作品領域の各割合

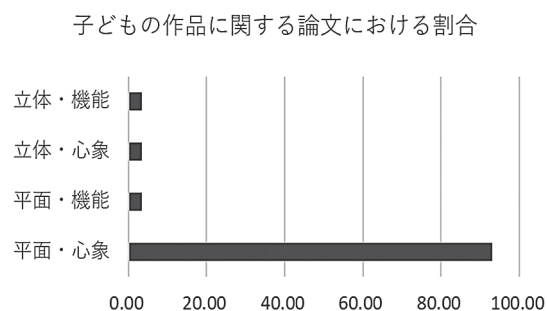


図6 子ども作品論文における作品種類の各割合

とが挙げられる。また、子ども以外の調査対象の中で最も割合が高かったのは、文献の32.76%であった。

(4) 子どもの作品の種類の各割合

子ども作品論文において、子ども作品論文における作品領域と、作品の種類をそれぞれ集計した(図5～6)。

図5の結果では、子どもの作品は主に、鑑賞活動よりも表現活動の割合の方が高い。また、図6の結果では、心象表現の平面作品が93.10%であり、子ども作品論文で取り扱われている作品は絵画作品であった。

(5) 研究目的の各割合

子ども作品論文で示された研究目的を分類し、集計した。本論で調査した子ども作品論文において言えば、研究目的は、「作品分析」、「表現活動」、「鑑賞活動」、「歴史」、「教科書分析」、「環境」、「教育方法」、「心理・印象」、「資質・能力」と「理論整理」の10項目に分類することができた。各項目の概要と、

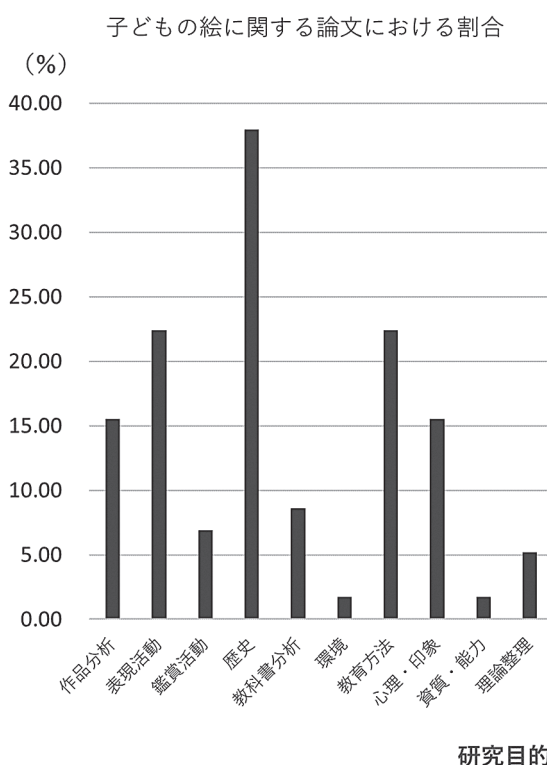


図7 子ども作品論文における研究目的の各割合

各項目に該当すると判断した論文を表1にまとめた。

そして、各10項目の研究目的を集計した結果が図7である。尚、一つの論文に二項目の研究目的が設定されている場合、一つずつの項目としてカウントした。例えば、児童画の歴史に関する文献を調査した上で、現在の絵画指導法について検討する論文だった場合、「歴史」にカウント1、かつ「教育方法」にもカウント1と集計した。重複して集計する理由

は、各研究目的の傾向を見て取ることをねらいとしているからである。

図7の顕著な結果は、割合が高かった研究目的は37.93%の「歴史」、22.41%の「表現活動」と「教育方法」、15.52%の「作品分析」と「心理・印象」である。

4 考察

2008年（平成20年）から、2023年（令和5年）の

表1 子どもの絵に関する研究目的の分類

項目名	内容
作品分析	子どもの作品の特性や特徴に対する検討を行っている論文
	【例】 秋山道広・初田隆「児童・教師・保護者による絵の見方（評価）に関する比較研究」『美術教育学研究』大学美術教育学会50(1), 2018, pp.25-32
表現活動	子どもの作品を通して、表現活動について検討を行っている論文
	【例】 木谷安憲「自分の子ども心に触れる描画活動「かいてみよう子ども心」—子ども心で描いた大人の絵と園児の絵—」『美術教育学研究』大学美術教育学会, 52(1), 2020, pp.145-152
鑑賞活動	子どもの作品を通して、鑑賞活動について検討を行っている論文
	【例】 片岡杏子「社会における子どもの美術教育の展開：「美術」の多様性からの考察」『美術教育学』美術科教育学会, 29(1), pp.165-177
歴史	子どもの作品に関する先行研究で示された理論や、子どもの絵に関する検討を行っている論文
	【例】 神谷睦代「倉橋惣三の幼年絵雑誌に求めた芸術性-大正期から昭和初期にかけての童画に着目して」『美術教育学』美術科教育学会, 44(1), 2023, pp.137-153
教科書分析	これまでの教科書に掲載された子どもの作品の分類や、作品傾向等について検討を行っている論文
	【例】 蜂谷昌之「博労小学校所蔵大正期尋常科児童図画作品に関する研究—図画教科書掲載図版との関係に着目して—」『美術教育学研究』大学美術教育学会, 55(1), 2023, pp.241-248

項目名	内容
環境	子どもの作品と、教室や他者との関係性等、教育環境との関係や相関性について検討を行っている論文
	【例】 小田久美子・高橋敏之「子どもの生活領域にある動物表象とその美術教育的課題の発掘に関する序論的考察」『美術教育学研究』大学美術教育学会55(1), 2023, pp.73-80
教育方法	子どもの作品の分析を通して、教育活動の展開方法や指導方法について検討を行っている論文
	【例】 井ノ口和子「『子どもの絵』を<見る>ことに関する考察—初等教科教育法（図画工作）の授業実践を通して—」『美術教育学研究』大学美術教育学会53(1), 2021, pp.33-40
心理・印象	子どもの作品を心理学の知見を用いて分析し、心理尺度を用いて子どもの作品に対する印象や評価について検討を行っている論文
	【例】 秋山道広・寺元幸仁・初田隆「児童・教師・保護者による絵の見方（評価）に関する比較研究Ⅱ 教師の主導性と子どもの自由度に着目して」『美術教育学研究』51(1), 2019, pp.9-16
資質・能力	子どもの作品制作の過程と作品やから、培われた資質や能力についての検討を行っている論文
	【例】 有原穂波・池内慈朗・小澤基弘・八桁健「児童の絵画表現にみられる認知的特性についての考察—MI理論とIQを分析の手がかりとして—」『美術教育学研究』50(1), 2018, pp.41-48.
理論整理	子どもの作品に関する知見や先行研究について整理している論文
	【例】 大泉義一「図画工作・美術科の授業における教師の発話に関する実践研究：図画工作・美術科の授業を構成する「第3教育言語」への着目」『美術教育学』美術科教育学会32(1), 2011, pp.69-83

期間における子ども作品論文の集計結果を踏まえ、以下の項では、現在の美術教育における子どもの作品の捉え方と、その要因について考察する。そして、第四次研究に向けて、子どもの作品に関する課題を整理する。

(1) 写実表現に向かう子どもの作品は研究対象となりにくい傾向がある

① 先行研究における子どもの作品の捉え方

本調査結果より、子どもの作品に関する先行研究において、写実的な表現に向かう子どもは研究対象となりにくいことが分かった。

その根拠として、小学生に該当する子どもの作品を対象とした先行研究の多さが挙げられる。図3の結果では、小学生は6歳以外は55%以上であったのに対し、中学生に該当する13～15歳の割合は10%未満、高校生に該当する16～18歳の割合は0%であった。また、調査対象としても、中学生は3.45%であった以外、高校生、中学校と高校の教員、中学校と高校の教科書等は、総じて0%であった。これらの結果から、子どもの作品に関する研究において、小学生や未就学児や乳児が調査対象である可能性が高い。

社会において、法律における子どもの年齢区分は法令によって異なるものの、13～18歳も「子ども」とする法令は多い。学校教育法における学齢生徒は「小学校又は特別支援学校の小学部の課程を終了した日の翌日後における最初の学年の初めから、満15歳に達した日の属する学年の終わりまでの者」とされている⁹⁾。厚生労働省によれば、児童の年齢区分において、本調査では含まれなかった18歳も子どもに該当する場合がある。例えば、児童福祉法では「18歳未満」とされ、子ども・若者育成支援推進法では、乳児期、学童期及び思春期（中学生からおおむね18歳まで）の者が子どもと示されている¹⁰⁾。つまり、社会と美術教育において、「子ども」の年齢に対する認識が異なっているとも言えよう。社会においては「子ども」であったとしても、美術教育においては、中学生や高校生は「子ども」としては捉えられにくいのである。

② 小学生や未就学児に傾倒する要因

小学生や未就学児の作品に関する研究が半数以上を占める一方で、中学生や高校生が研究対象となりにくい要因として、絵画の発達段階が関係している可能性が高い。

戦後以降の美術教育において、絵画の発達理論は複数あり、最も有名な理論は、ヴィクター・ローウェンフェルドによるものである。ローウェンフェルドは

絵画の発達段階を六段階に示している。表2は、ローウェンフェルドが示した各段階の名称と各段階の年齢区分を示し、表としてまとめたものである^{11)～16)}。

表2では「様式前」、「ギャングエイジ」、「疑似写実的」に該当するローウェンフェルドの理論に基づいて言えば、7～12歳の絵には、作者である子ども個人の中で理解している「概念」を表したり、作者自身も理解していない「無意識的」なことを作品に描いている状況が予想できる。

ただし、絵画の発達理論は、研究領域、時代や文化圏の異なる研究者によって異なる場合がある。本研究の根底概念であるCP構造を示した清田は東山と共に示した発達理論^{17)～22)}は表3の通りである。

表3では「図式期」、「写実の黎明期」、「写実期」が該当する。また、東山らの理論でも7～12歳の絵は、現実とは子ども個人が「知っていること」を表そうとするため、「矛盾がある」表現から徐々に現実世界への再現性が高まった「写実的」な表現に

表2 ローウェンフェルドの児童画における発達理論（文献に基づき筆者作成）

各段階の名称 (年齢区分)	特徴
なぐり描き ¹¹⁾ (2～4歳)	(1)未分化 運動感覚的経験。動作はまだ統御されていない。 (2)経緯 一定の動作の反復運動感覚的動作と視覚との間に連合を作りだす。動作が統御される。
様式化前 ¹²⁾ (4～7歳)	(1)絵と思考と現実との間の関係を発見。 (2)概念を探す。 (3)それを不断に探し求めて形態象徴が絶えず変化する。
様式化 ¹³⁾ (7～9歳)	人と環境とについての一定の概念を発見する。 形態象徴、すなわち「様式」の反復を通して自信を得る。 純粹様式においては、意図的経験は表現されていない。「人間」「木」など、単にそのものの自体である。 幾何学的線の使用。
ギャングエイジ ¹⁴⁾ (9～11歳)	(1)幾何学的線（様式）から離れる。 (2)おとなとの協力が欠ける。 (3)ギャング・エイジ (4)性について自己意識の拡大。
疑似写実的 ¹⁵⁾ (11～13歳)	知性の発達。しかし、まだ無意識的。自然主義的態度（無意識的）。視覚的傾向と非視覚的傾向。動作や劇的物語を好む。
青年期 ¹⁶⁾ (13～17歳以降)	環境と描写の結果に対する批判的自覚。 視覚型・触覚型あるいは中間型の明確な決定。

表3 東山らによる子どもの絵の発達と道筋
(文献に基づき筆者作成)

各段階の名称 (年齢区分)	特徴
なぐりがきの時期 ¹⁷⁾ (1歳半～2歳半ごろ)	はじめは点や短線をたたくようにして描く。次第に横線、波線、渦巻き線が加わり、丸や形がではじめる。 なぐりがきの後半では、イメージを描いて、つぶやきながらかく。
象徴期 ¹⁸⁾ (2歳半～4歳ごろ)	丸や形があらわれ、それに意味づけ(命名)する。 象徴的な形や頭足人のような絵記号をかき、その意味を説明する。 イメージのおもむくまま、羅列的・断片的にばらばらにかく。
図式期 ¹⁹⁾ (5～8歳ごろ)	漠然とした全体知覚が優勢で、記憶していること(知っていること)を絵にかく。 絵記号を組み合わせて図式的にかく。 画面上に空間設定ができる。平面的で重なり、遠近がない。
写実の黎明期 ²⁰⁾ (8～11歳ごろ)	部分知覚が優勢で、部分的に詳しく見ることができるが、全体的には見渡せないで、矛盾のある絵をかく。 図式的表現傾向から写実的表現傾向に移行する過渡期的な時期。 羅列的な表現から、立体、重なり、奥行、遠近などの空間的表現がではじめるが矛盾のある表現になる。
写実期 ²¹⁾ (11～14歳ごろ)	部分知覚と全体知覚が統合され、客観的な表現ができる。 観察力が増し、客観的、写実的であるがままの表現ができる。 明暗、陰影、立体感、奥行き、空間などが理解できる。 予想をたてて、計画的に作業ができ、批評、評価、鑑賞する力が育つ。
完成期 ²²⁾ (14～18歳以降ごろ)	高度な描写や表現ができ、技術的にも精巧な表現ができる。 外形の美だけでなく、内面的な心情や思想的な美も理解できる。 抽象性、思想性、社会性など、深まりのある思考や表現ができ、一人の人間としての土台が築かれる。

移行する作品である可能性が高い。そのため、社会への理念や、作品の視覚的な情報と現実とに矛盾がない表現で描かれている作品は、多くの鑑賞者にとって「理解した」と感じやすいと判断する人が多くなると予想できる。鬼丸吉弘が、中学生や高校生に該当する時期は「視覚が大幅に表現に参加し、多くの場合形成の主導権を握る時代」とし、「おとなの造形原理とまったく変りはなく、原理的にはおとなと

同じ段階に入ったとも言える」と述べた²³⁾ことを踏まえると、中学生以上の作品は、大人が描いた作品と同じものとして捉えられやすいと言えよう。

以上のことから、本調査結果において、大人の想定とは異なる表現をする小学生や未就学児の作品に傾倒した可能性は高い。

しかし、「環境と描写の結果に対する批判的自覚」が反映された表現や、「技術的にも精巧な表現」である中学生や高校生の作品には、大人、小学生や未就学児の作品とは異なる価値があるはずである。また、絵画の発達理論が研究領域、時代や文化圏の異なる研究者によって異なる様に、現在の中学生や高校生の表現の在り方や作品の持つ価値について絶えず見当が行われていく必要がある。そのため、本研究で行う子どもHSで、中学生や高校生の作品も取り上げることで、研究としての独自性を担保できると言えよう。

(2)「価値の普及」についての視点の不足

本調査結果において言えば、子どもの作品による「価値の生産」は行われているものの、「価値の普及」の視点が不足している現状を確認できた。「価値の生産」と「価値の普及」は、本研究の根底概念である文化的実践で示された価値との関わり方のことである。佐伯によれば、「価値の生産」とは、「『よい』とされるものごとをつくり出す」ことであり、「価値の普及」は「『よい』とされるものごとを多く残したり広めたりする技術を開発する」と述べている²⁴⁾。

図7の結果では、子どもの作品に関する論文での研究目的で最も高かった項目は「歴史」、2番目にたかった項目は「表現活動」と「教育方法」であった。子どもの作品を掲載している文献や教科書の歴史的な変遷や掲載作品の分析、子どもの表現過程に対する検討がなされていると言えよう。つまり、子どもの作品の見方を、歴史という視座から捉え直したり、表現活動と合わせて作品を分析で子どもの新しい表現への可能性を見出していると捉えると、「価値の生産」がなされている。「価値の普及」という点においていえば、研究論文として社会への普及がなされてはいる。しかし、作者である子どもが属する社会への価値の還元は直接的に行われていないことから、「価値の普及」の視点が不足していると言えよう。尚、2008年から2023年における先行研究は子どもの作品と社会との関わりについての論文は、片岡杏子による2本のみであった²⁵⁾。

以上のことを踏まえると、子どもの生み出した作品から価値を見出す学習活動は多くなされているも

の、実際にその価値を社会全体に伝えたり、広めたりする活動は少ない現状があると予想される。この現状は、子どもの創造性に関する課題として、社会への影響力や、文化との関わり方の弱さがあることとも合致すると言えよう。そのため、Csikszentmihalyiが示した創造性のシステムズモデルの「domain」や「field」に「person」である子どもの表現活動を組み込むには、本研究で計画している子どもHSの様に、意図的な働きかけの必要性が窺える。

5 今後の展望

本論では、子どもの作品に関する先行研究を調査することで、二つの成果を得られた。一つは、小学生や未就学児の作品を取り上げる研究が多く、中学生や高校生の作品への言及がなされていないことである。もう一つは、子どもの作品自体の価値を見出す研究はなされているものの、見出した価値を広める視点については不足している現状が確認できた。また、本研究は子どもの絵の発達への知見からの検討も必要となるため、発達理論に関する文献調査も進めていく必要がある。

今後は、第四次研究で行う子どもHSプロジェクトに向けて、より広い年齢の子どもを対象としたCP構造の実践研究を行う予定である。そして、多様な子どもの表現から新たな価値を発見し、創造性の育成に貢献する知見となることを目指す。

[註]

- 1) 佐伯胖『子どもと教育「学ぶ」ということの意味』岩波書店, 1995, pp.195-199.
- 2) 清田哲男・大橋功・藤田雅也「文化的実践を基盤とした美術教育の学習構造の研究」『美術教育』日本美術教育学会誌 304, 2020, pp.28-37.
- 3) 文部科学省HP, 『中学校学習指導要領 総則』2017, pp.15-16, 2024年5月22日閲覧, (https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_02.pdf)
- 4) Mihaly Csikszentmihalyi, "Society, culture, and person: a systems view of creativity." In R. Sternberg (Ed.), *The nature of creativity: Contemporary psychological perspectives* Cambridge:, Cambridge University Press., 1988, p. 29.

- 5) Ronald A. Beghetto, C. Kaufman "Beyond Big and Little: The Four C Model of Creativity", *Review of General Psychology*, 13(1), 2009, pp.1-12.
- 6) 松浦藍「子どもの創造性が社会に与える影響についての基礎研究—子どもの創造性に関する課題の理論的整理—」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』185号, 2024, pp.115-121.
- 7) 同上
- 8) 東山明・東山直美『子どもの絵は何を語るか—発達科学の視点から—』第二章 東山明, 日本放送出版協会, 1999, p.18.
- 9) 厚生労働省HP, 2024年5月22日閲覧, (https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000096703_1.pdf)
- 10) 同上
- 11) ヴィクター・ローウェンフェルド, 竹内清・武井勝雄・堀ノ内敏訳『美術による人間形成』黎明書房, 1995, p.142
- 12) 同上, p.169.
- 13) 同上, p.221.
- 14) 同上, p.261.
- 15) 同上, p.307.
- 16) 同上, p.486.
- 17) 東山明・清田哲男『子どもの絵の世界: 絵から読み取る発達の道筋とその指導』日本文教出版, 2018, p.7.
- 18) 同上, p.14.
- 19) 同上, p.30.
- 20) 同上, p.50.
- 21) 同上, p.67.
- 22) 同上, p.169.
- 23) 鬼丸吉弘『児童画のロゴス -新体制と視覚-』勁草書房, 1981, pp.97-98.
- 24) 佐伯胖『子どもと教育「学ぶ」ということの意味』岩波書店, 1995, p.199.
- 25) 該当する論文は、片岡杏子による「社会における子どもの美術教育の展開: 「美術」の多様性からの考察」(『美術教育学: 美術科教育学会誌』29, 2008, pp.165-177.と「子どもの表現と共生する社会」(『美術教育学』美術科教育学会誌 32, 2011, pp.111-122.)である。